

kaneko art gallery

オープニング展 - II

2020.7.10 - 7.27

徳永 雅之

- 1960 長崎県佐世保市生まれ
1985 東京芸術大学美術学部絵画科油画専攻卒業
1987 東京芸術大学大学院美術研究科(修士課程)壁画専攻修了

<主な個展>

- 1991 かねこ・あーとG1 (東京)
ギャラリー美遊 (東京)
1994 ギャラリーなつか (東京)
かねこ・あーとギャラリー「新世代への視点'94」(東京)
1997 かねこ・あーとギャラリー (東京)
1998 ギャラリー日鉦「SEQUENCE」(東京)
2002 かねこ・あーとギャラリー (東京)
2004 庭園ギャラリー櫻守 (埼玉)
2008 GALLERY APA (名古屋)
2011 ギャラリー健「The Scene of Light」(埼玉)
2012 「The Scene of Light」KTNギャラリー (長崎)
2014 ART TRACE GALLERY (東京)
2016 ぎゃらりー由芽 (東京)
2017 ナガノオルタナティブ 2017_01「Scene of Light」FLAT FILE SLASH (長野)
2018 Gallery 美の舎 (東京)
ギャラリー枝香庵 (東京)
2019 美容室cotton (埼玉)
Shell102 (東京)

<主なグループ展>

- 1995 「やわらかく重く」/ 埼玉県立近代美術館 (埼玉) / ライフギャラリー・オハイオ (95-96)
1996 「VOCA展'96」/ 上野の森美術館 (東京)
1998 「曖昧なる境界-映像としてのアート」/ O美術館 (東京)
1999 「新世代の軌跡」/ かねこ・あーと2 (東京)
2001 「光とその表現展」/ 練馬区立美術館 (東京)
2003 「2003両洋の眼展」/ 松坂屋美術館(名古屋) 他 (~2004)
2004 「色の博物誌・黄 地の力&空の光」/ 目黒区美術館
2005 「2005両洋の眼展」日本橋三越本店 (東京) 他
2008 「PVAF」(スコットランド)
2009 「MY Interaction 2009 大久保宏美 徳永雅之」Shonandai My Gallery (東京)
「二つの扉」徳永雅之+馬場健太郎 Galleryエル・ポエタ / 庭園ギャラリー櫻守 (さいたま)
2012 こづま美千子 + 高津美絵 + 徳永雅之「絵画から」ギャラリーなつか (東京)
2014 「絵画と彫刻 徳永雅之×エサシトモコ」ぎゃらりー由芽・ぎゃらりー由芽のつづき (東京)
2015 「形象への眼差し、光景への眺め」アートトレイスギャラリー (東京)
2016 「広がる光・育ってゆく断片」徳永雅之×久木田茜 ぎゃらりー由芽のつづき (東京)
2017 「どこかでお会いしましたね 2017」うらわ美術館 (埼玉)
2018 「いま そこにあるなにか」FEI ARTMUSEUM YOKOHAMA (神奈川)
2019 「どこかでお会いしましたね 2019」埼玉会館 (埼玉)
2020 「どこかでお会いしましたね 2020」埼玉会館 (埼玉)
「オープニング展 - I」kaneko art gallery (神奈川)

<パブリックコレクション>

- 2000 特別養護老人ホーム「さくら」エントランスホール壁画制作 (東京)
2001 エンターテインメントクルーズ船「ROYAL WING」(神奈川)
2004 日本サムスン株式会社(プライベートコレクション) (東京)
2008 パークハイアット上海
2017 ソラリア西鉄ホテル京都プレミア三条鴨川

<著書>

- 2008 「Tayutau テルミンの小品と光の絵画 溝口竜也+徳永雅之」(共著) / 冬青社

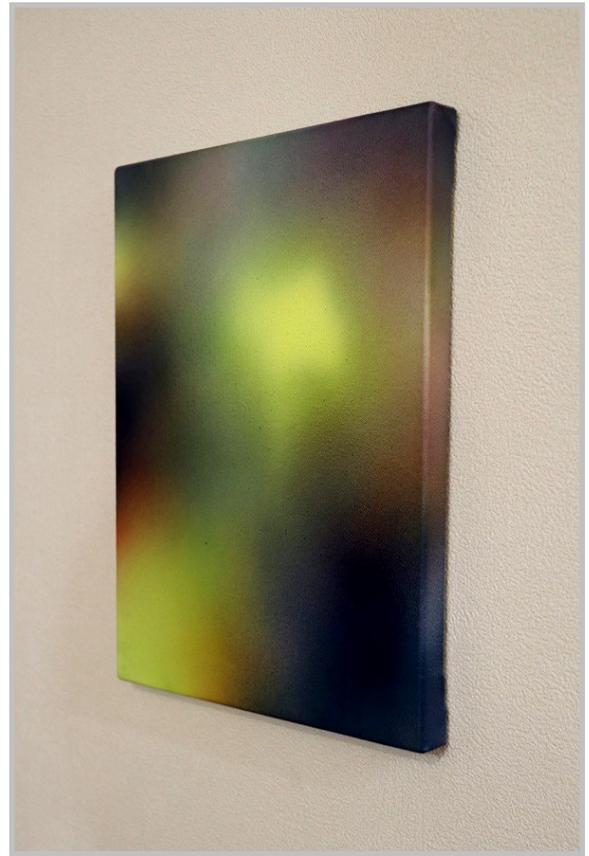
徳永 雅之 (Masayuki TOKUNAGA)
ペインティング (Paintings)



「Untitled」
(t-17)

2017年 アクリル
水性アルキド樹脂絵の具
エアブラシ、キャンバス

53.0×45.5cm



「Untitled」
(t-20)

2019年 アクリル
水性アルキド樹脂絵の具
エアブラシ、キャンバス

33.3×24.2cm

現在のようなスタイルになる前から、私はエアブラシを使って作品を制作していました。当初は印刷のプロセスを意識し、三原色のイエロー、マゼンタ（紫がかった赤）、シアン（やや緑みの青）に近い色のみで、実際の印刷と同じ工程で色を重ねて描いていました。つまり、黄、赤、青の順に色を重ね、重ね終えた時に制作は終了、といった具合です。

そのようなストイックな時期を経て、現在は即興的に吹き付けたグレイッシュなトーンの濃淡から発展させて描くようになりました。以前とは異なり、ライトブルーや白なども使いますが、基本的には三原色を重ねてデリケートなトーンを作っていきます。長く三原色だけで描いていたので、画面上で、どの色をどのくらい重ねたらどんな色になるかがわかるのです。

私は、絵の完成イメージは持たないで制作を始めます。昔はイメージスケッチをしていたのですが、即興性を重視するようになってからは、その必要がなくなりました。白いキャンバスの上に適当に吹いた、あらかじめ意図していない形に触発されながら描いていきます。

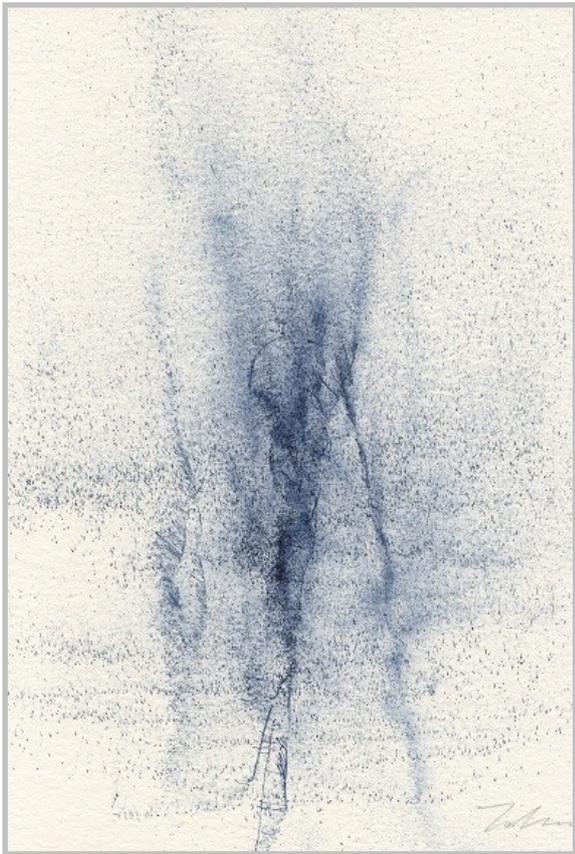
制作が進んでいくと、ある段階で「絵画的な方向性」のようなものが見えて来ます。即興性よりも構築的な思考の方が強くなっていき、絵と向き合っただけの時間が増えていきます。描きかけの作品を眺めていると、絵が「もっとこうしてほしい」と要求してくるのです。

それを受け、色彩や構図、その他のバランスなどを、私の中にある総監督がドライに判断し、統率していきます。たとえ魅力的な部分があったとしても、全体にとって邪魔だと判断されると、それは無慈悲に消されていきます。

私にとって重要なことは作品がキャンバスの矩形の中だけで完結しないことです。キャンバスの外に広がらない絵は小さくまとまっています。整えすぎないように整えていくのです。

徳永雅之

徳永 雅之 (Masayuki TOKUNAGA)
ドローイング (Drawings)



「GYD18_63」

2018年
アクリル、紙
エアースティック

20.0×16.0cm



「BM-023」

2019年
アクリル、紙
エアースティック

20.0×16.0cm

吹付けで描く私のペインティングには線というものが存在しません。ある時、独立した作品としての線描を使った制作を、私は随分長い間封印していたことに気づいたのです。

抑えていた線描に対する欲求が、今から十年ほど前にピークに達したので、鉛筆やボールペンなどを使って、作品として自立したドローイングをペインティングと並行しながら制作を始めました。

「ペインティングとの関連性など一切考えない」

「自分のアイデアと欲求に従って、思いついたことは全て試みる」

「線の多様性を認めること」

「自分の間隔の中にある形態のパターンや手の動きの癖を認めつつも、そこから離れることも重要視する」

「即興であること」

「落ち着くべきスタイルを探したりしない」

「これは自分の中に眠っている線の可能性の発掘作業である」

「自分から出たものはすべて認める」

そのようなことをぼんやり考えながら、思いつく限りの様々な技法を考えては試みてみました。自分の内部でのペインティングとドローイングは互いに干渉せず、うまく共存が出来る良好な関係が築く事ができたと感じました。

私は使用する画材や手法などにこだわらず、自由に制作していたつもりでしたが、ある時、ペインティングで使っているエアブラシを使うことを無意識に避けていることに気づきました。避けていた、というよりエアブラシで線描の表現をするという発想に結びつかなかったのかもしれませんが。とにかく吹付けによる線のアプローチはまだ試していなかったのです。

何枚か描いた時点ですぐに、この一見ストイックな道具から新しいものが生まれる予感がしました。

現在、私はエアブラシを使った線の可能性を探っている最中です。

徳永雅之

アンリ・ミショー

アンリ・ミショー (Henry Michaux)
リトグラフ (Lithographs)



「1967-10」

1967年
リトグラフ

45.0×32.5cm



「1974-14」

1974年
リトグラフ

50.0×32.0cm



「1974-17」

1974年
リトグラフ

50.0×32.0cm



「1967-7」

1967年
リトグラフ

45.0×32.0cm

アンリ・ミショー (Henry Michaux)
参考作品 (Reference work)



「無題」

1967年
グアッシュ、紙

38.5×28.4cm

アンリ・ミショーのリトグラフは、父(前オーナー)のコレクションの中でも、私が特に好きなもののひとつです。ミショーは油絵や水彩も数多く残していますが、単色で構成されたリトグラフは、ミショーの世界をよりシンプルに味わえるような気がして、個人的にはとても好きな作品群です。

アンリ・ミショー(Henry Michaux,1899年~1984年)は、ベルギー生まれのフランスの詩人であり画家です。特異なイメージや内面的風景をそなえた詩によって、またアンフォルメル先駆けとなった絵によって、20世紀の文学と美術において独自の地位を占めたと言われています。

ミショーの作品はこのように“特異な”という表現で語られることが多いのですが、現代においては内面的世界や心理学における無意識の探求が進む中で、決して特異という言葉では表現しきれない豊かさを感じる方も多いのではないかと思います。

今回、徳永雅之さんの作品と共に展示させていただいたのは、二人の作家にどこか共通の内面的世界の豊かさを感じたところに、そのきっかけがあります。ぜひこれらの作品のもつ豊かさと表現が、ギャラリーの空間の中で響き合うのを感じていただけたらと思います。

kaneko art gallery 金子 太郎

アンフォルメル(フランス語: Art informel、非定型の芸術)は、1940年代半ばから1950年代にかけてフランスを中心としたヨーロッパ各地に現れた、激しい抽象絵画を中心とした美術の動向をあらわした言葉である。同時期のアメリカ合衆国におけるアクション・ペインティングなど抽象表現主義の運動に相当する。